

だ。

今日まで生き永らえた私が子や孫に年寄りとしての一言を訓え残すとすれば、まず「健康第一」ということです。

私共の年代の若い日本人が沢山海外へ遠征して、護国の鬼と化した者も多い。亡き御霊の御冥福を祈り、残された遺家族の御健勝と御多幸を切にお祈り申し上げ、またできるだけのお手伝いをするのは、私共の当然の責任と思えます。

最後に恩欠者としての幕引きに際して、後世の評価に称えられる程の高潔な、誇りの高さを目指し、将来の若い自衛官、国防に命をかける若人の尽忠報國に一点の迷いも生じないような鮮やかな幕引きのあらんことを祈る。

ビルマの初年兵

福岡県 田中 始

私は昭和十八（一九四三）年徴集兵で、甲種合格となり、昭和十八年十二月初旬に久留米の第十八師団（菊）山砲兵第十八連隊に入隊しました。

私の家庭は母、私、妹の三人家族でした。父は五十五歳で若くして死去、姉は私より十歳上で既に嫁いでおりました。妹はまだ小学校二年生でしたから私は非常に心配でした。母は他家の農業の手伝いをして生計を立てておりました。

私は入営までは、伐採した丸太を山から馬に曳かせて道路まで運び出す馬曳きの仕事をしていましたから、馬の取扱いには馴れておりましたので山砲兵になったと思えます。

昭和十九年二月には一期の検閲を終え、原隊が

ビルマにあるのですが、当時は南方行きの輸送船団が米国の潜水艦にやられ、船舶不足になったのか私と同時に入隊した兵隊の半分は予定通りに出発しましたが、私達残りの半分は一カ月の帰休となり家に帰されました。

母は息子が再び家に帰ってきたので大喜びしてくれましたが、一カ月後には赤紙召集がきて、再び悲しい別れとなりました。先に出発してビルマに行った同年兵は、私がビルマに着いた時には一人残らず戦死しておりました。

昭和十九年三月、下関を出航、二十隻の大輸送船団でした。甲板まで兵隊がいっぱいでした。台湾沖で空襲警報が鳴り高雄に緊急入港しました。大型輸送船一隻が被雷したが沈没は免れたそうでした。船員さんからは「兵隊さん、一発喰らえば、お陀仏さんだよ」とおどされました。

シンガポールに一旦入港し、それから北上してタイ国のバンコクに到着、泰緬鉄道に乗せられて

ビルマのトングーンで下車、あとは徒步行軍でマンドレーに到着したのが昭和十九年六月でした。

山砲隊ですが内地からは山砲は持参せず、腰のゴボー剣だけの武装でした。機関銃の教育も受けましたが機関銃そのものが渡されず、射撃したこともなく、何のために教育されたのか分からずじまいでした。

山砲は分解して馬で搬送しますが、山に入ると人力搬送に切り替えます。砲身だけで二〇〇キロもあり、二人で担ぐのですが中々大変です。ビルマは竹が多いので、竹を割って砲身を包み、馬で曳いたこともあります。

馬を使う部隊では人より馬が尊重されます。たまたま馬の扱いが悪く負傷でもさせたら「貴様ら兵隊は一銭五厘でいくらでも補充できるが、馬様はそんなわけにいかないんだ、この野郎！」と悪口雑言の上、目から火の出るビンタを見舞われしました。心の中では「弾は前からだけではないぞ」と憤懣を吐き出したものです。

ビルマ戦線もインパール作戦が失敗してから敗色日増しに濃くなり、敵機の空襲で昼間の行動は制約され、行動は夜間が多くなり、山砲もいつか野戦重砲になりました。そして私ら初年兵は重砲の弾丸運びが主な任務となり、トラックから弾丸二発を両肩にして大砲のある陣地まで運搬しました。夜間は道を迷わぬように腰ヒモを三人に縛りつけながら弾丸運びに従事しました。

一定の場所に駐屯して訓練教育を受けることは全く無く、唯々命令されるまま動き回りましたので、六十年経った今、地図を見せられても地名が思い出せませんのです。

イラワジ河の左岸に砲の陣地があり、英印軍の大砲も対岸にあり、互いに射ち合うのですが、こちらが一発打つと英印軍は五発射ち返してくる状態で、加えて敵機が来襲してくるので戦争になりませんでした。

河岸に葦が背高く生えていて格好の隠れ場にな

るので、葦の天端を束ねて屋根代わりにし、下台を作って座り、敵機の監視を一週間したことがあります。

マンダレーの北にシンクという町があり英軍がイラワジ河を渡って攻めてきました。我が方は防戦かなわず敗れてシャン高原のジャングルに後退しました。

山中に入ると野戦病院が逃げた跡らしく、到る所に患者らしき兵の死体の山があり、余りの惨状に息を呑みました。まだ亡くなって間もないと思われ、白骨化はしておりませんでした。炊いたまま手をつけず死んだと思われる飯盒の中に、銀飯がぎっしりと詰まっております。それをしっかりと抱いたまま死んでいます。服、靴、巻脚絆等すべて我々の物にくらべれば新品同様でした。

「認識票を外し、首だけ出して埋葬せよ」との命令に従って埋葬しましたが、仏様に手を合わせ「あなたの服と靴をどうぞ私に下さい」と、お願

いして服と靴を頂戴しました。靴の無い死体が多

かったのは私達より先に行った兵隊が同じように頂いたのでしょう。首だけ出して埋葬するように命ぜられました。理由が判りませんでした。首だけ出していれば誰だか見れば判るからなのかも知れませんね。

ビルマは米作で年二回穫れ、民家は精米したら竹筒に入れて日本兵の目に入らぬように薪の山に隠しておりました。親日的だった原住民も日本兵の悪さに次第に反目的になり、落下傘爆弾の誘導もやるようになりました。

大学卒の一等兵は「住民から飯を貰う時は半分を分けて貰え、全部取ってはいけないぞ」と教えられました。

敵は空から落下傘爆弾を落とすので、道があるからと進めば、いつどこで爆弾が破裂するか判らないので、空を見上げては方向転換しなければなりません。遠回りの路を進まねばならない事は頻繁にありました。

所属部隊ともはぐれ、食事を取れない時は軍の

連絡所を探して行くと、食事は与えてくれ、部隊の所在も教えてくれますが、判らぬ時は通りかかった部隊に頼んでくれて、そこに入るように言われました。

山に入る時は一緒だった仲間ともいつしか離れて独りだけになり、敗戦の初年兵は本当に哀れです。

前述したように水に足を漬けて一週間も監視したせいか脚気になり、カロリーの野戦病院に入りました。

戦況はますます悪くなり、患者一五〇人を貨車搬送で後送することになり、伝令として同行を命ぜられました。患者輸送中に死亡する者が相当あり、停車した時に線路の傍らに穴を掘って埋葬しました。

着いた所はタイ国の陸軍病院で、設備も整い、日本人軍医も多く薬品もたくさんありました。

タイ国に入りバンコクに近づくと、沿線の風景

が何となく平和でした。貨車から見える風景の中で新しい服を着た日本兵の集団が柵の中におりました。実は終戦になった事を我々だけが知らなかったのです。

私は原隊に帰らねばと思い軍医さんに申しましたら「戦争は終わったのだ。もう隊に帰らんでもよい」と申されましたので帰らずにおりました。

そのうちに飛行機からビラが撒かれました。

それには八月十五日に天皇陛下が終戦の詔勅を下されたことが書いてありましたので本当に日本が負けたんだと思いました。

終戦になると軍の倉庫が解放されましたが、人は屋根用のトタン板でした。理由はタイの住宅の屋根はワラ葺きなので、泥棒はワラを掻き分けて天井裏の貴重品を盗むので、屋根をトタン葺きにして盗難防止用にするのだそうです。また、タイ国民は中国系が多く一度住民の手に渡った物は半分しか戻らないのが常識だそうです。

そのうち陸軍病院ごと収容所に入ることになり、ナコンナヨークという町の中にある捕虜収容所に移りました。バンコクの東方にあたる町でした。収容所はタイ国の管理下であったので給与は米食で、質量ともに優良で、私は初めて人間らしい気分になりました。労働は無く、ただ野菜は自主栽培でしたが、それも格好な運動になりました。日タイ条約が結ばれていた結果かしらとも思いません。

日本政府からの要請があったせいと噂になりましたが、炭鉱労働の経験者は早く帰国させるから申し出るようにと達しがあったので、私は一日も早く家に帰りたいだったので申し出ましたが「田中は経験なし」と蹴られました。帰る者の中に近所の人がいたので私の無事を私の家へ知らせようと頼んで置きました。

復員する時、バンコクで乗船する際、英軍の検査は特に厳しく全部没収されました。また時々威嚇のため拳銃を上空に向けて発砲し、腹がたつた

事を覚えております。

昭和二十一年七月品川に帰着しました。故郷に帰ったら、約束通り戦友が私の無事を留守宅に知らせに来てくれたと、母が笑顔で話してくれました。

品川に上陸して服を貰った時に、ビルマの山中で亡くなった兵隊から戴いた軍服を着替えて、「永い間本当にありがとう」と名も知れぬ英霊に手を合わせました。

復員後しばらくしてから、近所の区長さんが私に話があると訪れて来ました。なかなか話しませんがニヤニヤしながら「マアいいわ」と帰ろうとするので、私が問い詰めたら「実はアンタの遺骨を取りに来るよう知らせが来たので……」と言いにくそうに言いました。

私が患者輸送が終わり、原隊に帰ろうとしたが軍医から止められて、そのまま原隊に帰らなかつたので、原隊で死亡扱いにしたのであろうと思ひ

ます。墓を建てたら本人が帰って来た話は聞きませんが……。本人が生きて帰っているのに骨があとからくるとは、本当に笑い話ですよ。

私が初年兵としてビルマに行ってから後続の初年兵は二人だけ入ってきましたが、その消息はわかりません。何しろ軍隊の初年兵は惨めなものです。負け戦においては尚更です。戦争はやってはいけませんね。

私は孫に「戦争はいけません」と良く言い聞かせております。現在私の家庭は、私が八十歳、妻七十五歳、息子四十一歳、嫁四十歳に孫三人の七人家族です。息子夫婦は共稼ぎのサラリーマンです。母は七十八歳で亡くなりました。

私は昭和十八年二月に入隊、同二十一年七月帰国するまでの三年五カ月の間一度も給料をもらっておりません。国民年金三万円だけが私の収入です。

私の小学校の同級生十八人のうち戦死十人、病

死五人、生存三人だけでした。他の部隊では、戦友会がありますが、私の隊では消息不明者ばかりで会が成り立ちません。六十年前の記憶で、たまに電話すると「私のところは戦死しておりません」との返事です。

空腹だった

ビルマ戦線従軍記

福岡県 久富 幸夫

私は大正十一（一九二二）年二月一日、福岡県山門郡瀬高町大字高柳で生まれました。

私が軍隊に入ったのは、昭和十八（一九四三）年四月十日、久留米の野砲兵連隊へ初年兵として入営を致しました。

入営をしました当時の私の家庭の状況は、

父 健在 農業
母 “ “

長男本人 “ “
次男 “ “
叔母兄妹 “ “（寡婦）夫は戦死
妹 “ “ 小学生

でした。我が家は元禄時代より続いた代々の富農の家系で篤農家と評されていました。当時は農地六町歩を、その内自作は三町歩余でした。以上の実態で私が軍隊に入るとは、労働力に大穴があいてくるので、家にとっては苦しいことでした。

時局柄祖国は大戦に突入して、国運の興廃に総動員の御奉公の真只中です。男子の本懐と誓って勇躍家郷を後にしました。

同じ日に入営した町内の壮丁は四人。歓呼の聲、打ち振る旗の波、町の各界代表者の激励、この状況は既に六十年を経た現在でも、克明に記憶に残っております。余談ながら四人の半分の二人は、残念にも名誉の戦死。私ともう一人が無事に復員生還できて、武運長久を家族と共に感謝しております。